



竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介(十) : 52蜻蛉香 ~ 54夢浮橋香

著者	矢野 環, 岩坪 健, 福田 智子
雑誌名	社会科学
巻	46
号	1
ページ	1-13
発行年	2016-05-30
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014481

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（十）

—— 52蜻蛉香／54夢浮橋香 ——

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二） 1 桐壺香／6 末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三） 7 紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四） 13 明石香／18 松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五） 19 薄雲香／24 胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六） 25 蛩香／30 藤袴香」（『社会科学』第44巻第4号、二〇一五年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（七） 31 真木柱香／40 御法香」（『社会科学』第45巻第1号、2号合併号、二〇一五年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（八） 41 幻香／47 総角香」（『社会科学』第45巻第3号、二〇一五年十一月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（九） 48 早蕨香／51 浮舟香」（『社会科学』第45巻第4号、二〇一六年二月）の続編

矢野環
岩坪健
福田智子

として、52蜻蛉香／54夢浮橋香までの三つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

なお、本稿をもって、一連の竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介を終える。全体のまとめについては、別稿を期す。

凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには「」を付して丁数を記す。
- 一、考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。(1) の冒頭には、構

造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第43巻第4号)を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

52 蜻蛉香

【翻刻】

△蜻蛉香

ありと見て手にはとられずみれば又

行多もしらずきえしかげろふ

一 名乗紙にて聞くべし。

一 一二三の香、各二包、客香一包、都合七包の内、六包出香

とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 一二の香、外に拵へ試に出す。其外試なし。」七六ウ

一 一二の香、四包の内、一包除け、三の香、客香を加へ、六

包とし、打交て、一炷充焚出し、六炷終て聞に随ひ名乗紙

に左の如く名目を認出す。

一二の内一炷出たるは かげろふと書

一二の内二炷出たるは

三の香二炷出たるは

客香出たるは

(初炷を陽と書
後炷を炎と書)

(初炷を蜻と書
後炷を蛉と書)

夕ぐれと書」七七オ

一の香除たるは ありと見てと書

二の香除たるは 見れば又と書

三の香二炷結ざるは中にあらず、点なし。

紙	蜻	夕暮	陽	蛉	かけろふ	炎
	見れば又					
名乗						

如此認出すべし

見分のために朱字を
書添置く也。香会には
名目斗りを認てよし。

一 記録点屋次第」七七ウ

○(朱) 二の香の内にて出香有は

同香(朱) 両聞二点充、片聞一点充。

間違各星一つ充。是は試を聞たる故

の過怠也。

○(朱) 二の香の内にて除香有は

同香(朱) 両聞 (出香三点充
除香一点充)

片聞一点充

○(朱) 三の香 二炷聞、各一点充。片聞、点なし。

○(朱) 客香 三点充

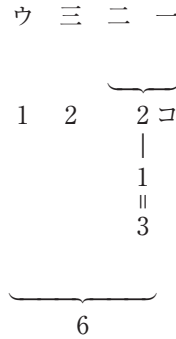
右各独聞は一点の増を加ふるべし。記録認様次に出す。」七八オ

蜻蛉香之記

〔表〕 七八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、「一」「二」「三」(地香)の香を各二包、客香一包の計七包のうち、六包を出香する。試香は、地香の中でも「一」「二」の香のみ別途行い、「三」の香と客香には試香はない。

試香のある地香「一」「二」の四包から一包を除き、「三」の香と客香を加えて六包にし、一炷^{*}ずつ焚く。すべて焚き終わってから、名乗紙に、一炷目から順に聞きの名目を記す。

すなわち、「一」「二」の香は、どちらかの香が一包除かれていることから、一炷のみ出た香は「かげろふ」、二炷出た香は、初炷を「陽」、後炷を「炎」と書く。また、「三」の香は必ず二炷出るが、試香がない香であるので、初めて聞く二炷をそれと判断し、初炷を「蜻」、後炷を「蛉」と記す。客香もまた、試香がない一炷のみの香として聞き分け、「夕ぐれ」と書く。そして最後に、「一」「二」の香のうち、どちらが除かれたかにより、

「一」の香ならば「ありと見て」、「二」の香ならば「見れば又」と記す。これは、「一」「二」の香について、前述の一炷(かげろふ)と二炷(「陽」と「炎」)に区別した上で、試香のとおり両者を正しく聞き分けているかを問うものである。

記録点は、「一」「二」の香のうち、二炷出た香について、両方聞き当てた場合は各一点、計二点となり、片方だけでも一点が与えられる。だが、聞き違えれば、星一つ^{*}を付す。これは、試香があるのに聞き違ったことに対する罰則である。また、一炷のみの香については、まず「かげろふ」を聞き当てて三点、次に、除かれた香が「一」(ありと見て)か「二」(見れば又)かで正しく答えれば一点を得る。どちらか片方を正答した時は一点止まりである。「三」の香は、二炷とも聞き当てて各一点、計二点となる。片方だけでは点にならない。また、客香は、聞き当てると三点を得る。なお、独り聞きの場合は、以上の得点に一点ずつ加算する。

蘭之園本は、「一」「二」の香各三包(試香なし)と、「かげろふ」の香四包(試香あり)の計十包を用意し、一炷聞きにする。試香のない「一」「二」の香は、無試十炷香の要領で、最初に出た香に「ありと見て」の札を、また、もう片方の香が出たら「見れば又」の札を打ち、以後、同香には同じ札を打っていく。試香のある「かげろふ」には「かげろふ」の札を打つ。「かげろ

「ふ」を聞き違えた時のみ、星一つを付す。蘭之園本の札銘はすべて、竹幽本の聞きの名目に見え、また、試香のある香を聞き違えた場合に星を付けるなど、両者で共通した点もあるが、本香の数や答え方、組香の構成は、両者で全く異なっている。

(2) 『源氏物語』との関わり

蘭之園本の名目は「ありと見て」「見ればまた」「かげろふ」の三つで、すべて巻名歌に詠み込まれている。竹幽本は、それらに「夕暮れ」が加わる。「夕暮れ」の用例は、当該巻だけでも五例ある。「蜻蛉」は、成虫になると数時間で死ぬ。無常やはかなさの象徴である。

浮舟が失踪して入水したことを知った薫は、ある夕暮れ(⑥二七五頁)¹⁾、蜻蛉(同頁)がはかなげに飛ぶのを見て、巻名歌(同頁)を詠んだ。蜻蛉は、薫が思いを寄せたものの、亡くなったりほかの人と結婚したりした、宇治の三姉妹(大君・中の君・浮舟)を暗示する。

53 手習香

【翻刻】

△手習香

身をなけしなみたの川のはやき瀬を

しがらみかけて誰かとゞめし

一 一の香三包、二の香二包、三の香三包、四の香二包、五の香三包、都合十三包の内、二包取除け、残十一包出香として、皆焚終り包紙を開くべし。

一 陽香三種^五、試なし。陰香二種^四、外に拵へ^{七九オ}試に出す。

一 陽香は無試十炷香の通りに札をうつべし。上下結たるを中りとす。陰香は試の通りに札をうつべし。

一 陽香の中りは札銘を不認、左の名目を記すべし。

一 の札を 小野尼 三の札を 引板音^{ヒタノラト}

五の札を 手習君^{七九ウ}

一 記録点は、陽香独聞三点、二人より二点充、陰香独聞二点、

二人より一点充也。点に正傍有り^{札と香と同名の中を正と定。傍二点は}

正一点に対す。陰香の間違は何人にも星一つ充付る也^{陰香}

^{を聞た。を聞た。}

一 十三包の内二包除時、もし陽香の内にて同香二炷除けば、一

包出香に残る。是を聞中たるは、手柄とする也。此点は朱

にて独聞七点、二人五点、三人より四点充^{ハオ}かくるべ

し。

一 札数壱人前十三枚、十人分百三拾枚也。

札表

十炷香の札紋に同し。

札裏

- 一 三枚 二 二枚 三 三枚 四 二枚
五 三枚

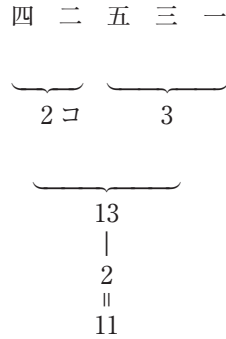
一 記録書様左に記す。」^{ハ〇ウ}

手習香之記 五五除（朱）

〔表〕^{ハ一オ}

【考察】

（一）竹幽本組香の方法



^{*}本香には、「一」の香三包、「二」「四」の香二包、「三」「五」の香三包の計十三包の中から二包を除き、残り十一包を出香とする。答えの札は、一人分十三枚を必要とする。札の表は十炷香札と同じでよいが、裏は、「一」「三」「五」を各三枚、「二」「四」を各二枚用意する。本香に先立ち、陰香（「二」「四」の香）には、別途、^{*}試香を行う。陽香（「一」「三」「五」の香）三種類には試香はない。

陽香は、無試十炷香の要領で札を打つ。^{*}すなわち、聞いたこ

とのない香は三種類出てくるはずなので、それらが最初に出た時、順に「一」「三」「五」の札を打ち、その後は同香に同じ札を打っていく。一方、陰香は試香の通りに打てばよい。

本香をすべて焼き終わってから包紙を開き、正答を披露する。陽香を聞き当てた時には、「二」「三」「五」の札銘ではなく、順に「小野尼」「引板音」「手習君」という聞きの名目を記す（ただし、「香之記」には、すべての陽香を名目で記している）。陰香は、聞き当てたか否かに関わらず、札銘をそのまま書く。

記録点について、陽香の独り聞きは三点、二人からは二点に対し、陰香の独り聞きは二点、二人からは一点である。また、陰香を聞き違えた場合は、^{*}星を一つ付す。陰香は試香があるため、聞き当てても得点は低く、聞き違えれば減点される。

また、香席の冒頭で十三包から除かれた二包が、陽香の同香二包であった場合は、残り一包が出香されることになる。陽香には試香がなく、この一炷を聞き当てるのは難しい。そこで、この一炷を聞き当てると、その功績として、独り聞き七点、二人からは五点、三人からは四点が与えられ、記録には朱で記す。また、陽香は、同香が二炷あるいは三炷出た時には、無試十炷香のごとく、同香を二炷以上聞き当てた時にのみ点が得られる。

なお、竹幽本は、記録点について、点には「正傍」があり、札と香とを同名で聞き当てれば「正」、異名なら「傍」と説明して

いる。「傍」二点で「正」一点に等しいというから、その差は大きい。そして、陽香を無試十炷香として札を打てば、実質上、香を聞き当てたとしても、点が「正」か「傍」かは、出香の順序による全くの偶然に左右されるということになる。あるいは、同香すべてを聞き当てれば「正」、同香の部分当たりを「傍」とすべきところか。

蘭之園本は、「一」「二」の香各五包（試香あり）と客香「手習」の香一包（試香なし）の全十一包を用意する。そして、「一」の香三包、「二」の香二包の計五包と、その残りの五包の二つに分け、そのどちらか一方に「手習」の香を交せて六包とし、さらに二包ずつ三組を作って二炷聞きにする。竹幽本と比較すると簡便な構成である。ただし、蘭之園本が用いる五つの聞きの名目のうち、「引板の音」「手習の君」は竹幽本にも見えるが、「小野」（竹幽本では「小野尼」）「山里」「軒の紅梅」はない。竹幽本は、名目よりもむしろ、陰陽に分けた香によって、物語の男女関係を象徴的に示そうとしたものと見られる。

(2) 『源氏物語』との関わり

前述のように、蘭之園本の五つの名目のうち、竹幽本にないのは、「山里」と「軒の紅梅」である。前者は、『源氏物語』当該巻に十一例見える語だが、後者は、『源氏物語』『源氏小鏡』²ともに見られる「閨のつま近き紅梅」（⑥三五六頁）に拠ると考え

られる。

失踪した浮舟は意識不明になったが、たまたま通りかかった尼君たちに助けられ、比叡山の麓、小野に引き取られる。娘を亡くした尼君は、浮舟を娘の生まれ変わりだと思い、介抱する。快復した浮舟は手習（⑥三五五頁など）に精を出す。これにより浮舟は、手習の君と呼ばれるようになる。やがて浮舟は念願だった出家を果たし、勤行の合間にも手習に励んだ。秋になると小野でも稲刈りが始まり、「引板ひき鳴らす音」（⑥三〇一頁）が聞こえた。

54 夢浮橋香

【翻刻】

△夢浮橋香

法のしと尋ぬる道をしるべにて

思はぬ山にふみまどふかな

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 法の師の香、尋ぬる道の香、思わぬ山の香、踏まどふの香、各二包充、夢浮橋の香一包客香、都合九包出香とし、「ハ一ウ九

炷皆焚終りて包紙を開くべし。

一 五種の香包分様

法の師香 一包 尋ぬる道香 二包

右三包は青紙の香包を用

法の師香 一包 思わぬ山香 一包 踏まどふ香

一包

右三包は黄紙の香包を用

思わぬ山香 一包 踏まどふ香 一包 夢浮橋香

一包」八三オ

右三包は赤紙の香包を用

一 出香九包打交て、其内より青紙包の三炷を焚出して、札筒

を廻す。三炷の内、一炷有香は、何番目と聞て、其香に合

て札をうつ（飯合一炷ある香、二番目に出たるは、二の札うつへし、皆是に準へ。）扱又黄紙包の三炷を焚出し

て、折居を廻すと、初三炷の内に出たる香、何番目に有と

聞て、其香に合て札をうつ。又赤紙包の三炷を焚出して、札

に盆を廻すと、青黄包の内にて聞ざる香」ハニ何番目に出

たると思は、其香の札をうつ也。是は夢浮橋香なる故に専

一に聞べし。三炷間、三次終て記録に記し、香包紙を一同

に開て点を定る也。

一 記録には、番付の札名斗り認め、其余は明置く也。香本に

は、出香の通り認てよし。点は、法の師独聞二点、二人よ

り一点充、二炷ともに聞は二炷目は一点増をかくるべし。夢

浮橋独聞五点、二人より四点充也。猶、記録認様次に顕す。」

八三オ

夢浮橋香記

〔表〕 八三ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

	包	青	黄	赤
法の師		1	1	
尋ぬる道		2		
思はぬ山		1	1	1
踏まどふ		1	1	1
夢浮橋	1			
	初	中	後	
	1	1	1	9

『源氏物語』に依拠する組香では、一般に、最終帖「夢浮橋」を欠く。蘭之園本にも見られない。その点で、「夢浮橋香」を有する竹幽本は、きわめて珍しい伝書と位置付けられよう。

* 本香には、「法の師」「尋ぬる道」「思はぬ山」「踏まどふ」の香、各二包と、客香「夢浮橋」の香、一包の計九包を出香する。すべての香に試香はない。答えには、十炷香札を用いる。

本組香は、初段・中段・後段に分かれる。

初段は、「法の師」の香を一包と「尋ぬる道」の香二包の全三

包を青紙の香包にして用意する。三炷のうち、一炷ある「法の師」の香が何炷目に出たかで、「一」「二」「三」のいずれかの札を、廻ってきた札筒に打つ*。

中段は、「法の師」「思はぬ山」「踏まどふ」の香、各一包全三包を黄紙の香包にして用意する。三炷のうち、初炷に出た香（「法の師」の香）が何炷目に出たかで、初段と同様に札を打つ。中段では、折居^{*}を廻す。

後段は、「思はぬ山」「踏まどふ」「夢浮橋」の香、各一包全三包を赤紙の香包にして用意する。初段・中段で出なかった香を聞き当てる。すなわち、中段で「思はぬ山」「踏まどふ」の香はすでに出ているため、「夢浮橋」の香が何炷目に出たかを答える。ここでは盆を廻して札を打つ。

以上のとおり、三炷聞きを三度行い、九炷すべてを焚き終えたら、答えの札を記録して、包紙を開き正答を披露し採点する。記録には、初段・中段は「法の師」の香、後段は「夢浮橋」の香が何炷目に出たかのみを、札名「一」「二」「三」で記し、その他の部分は空欄のままにする。もともと、「香本」（ここでは「香之記」の表題の次、「本」と記された行を指す。）には、出香の順序通りに香名を記してよい。

記録点は、「法の師」の香について、独り^{*}聞きは二点、二人からは一点である。また、初段・中段の二炷をとともに聞き当てた

時は、二炷目に一点を追加する。「夢浮橋」の香では、独り聞きは五点、二人からは四点である。「法の師」に導かれながら「夢浮橋」にたどり付くという趣向が見て取れる。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本の五つの名目は、「夢浮橋」が巻名、「法の師」「尋ぬる道」「思はぬ山」「踏み惑ふ」は巻名歌に拠る。このうち「法の師」とは、浮舟を出家させた僧侶を指す。薫はこの僧侶から浮舟が生きていることを聞き、浮舟に宛てて送った手紙に、「仏の教えを聞きに僧侶を訪ねてきたのに、浮舟の消息を聞かされ、思いがけず恋の山に踏み迷ってしまった」という意の巻名歌を書き添えた。しかしながら、仏門に入った浮舟は手紙を受け取らず、薫にも会おうとしない。

薫と浮舟との再会がないまま、『源氏物語』は幕を閉じる。巻名になった「夢浮橋」という語は、『源氏物語』には見られないが、薄雲の巻で光源氏が口ずさんだ古歌に酷似した表現を見出す。

世の中は夢のわたり^二の浮橋^一かうち渡りつつ物をこそ思へ

(②四四〇頁)

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝

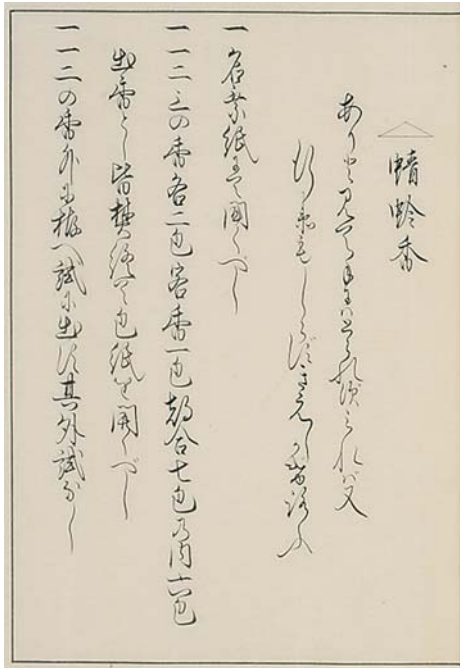
文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号253330403、いずれも平成25〜27年度)における研究の一部である。

注

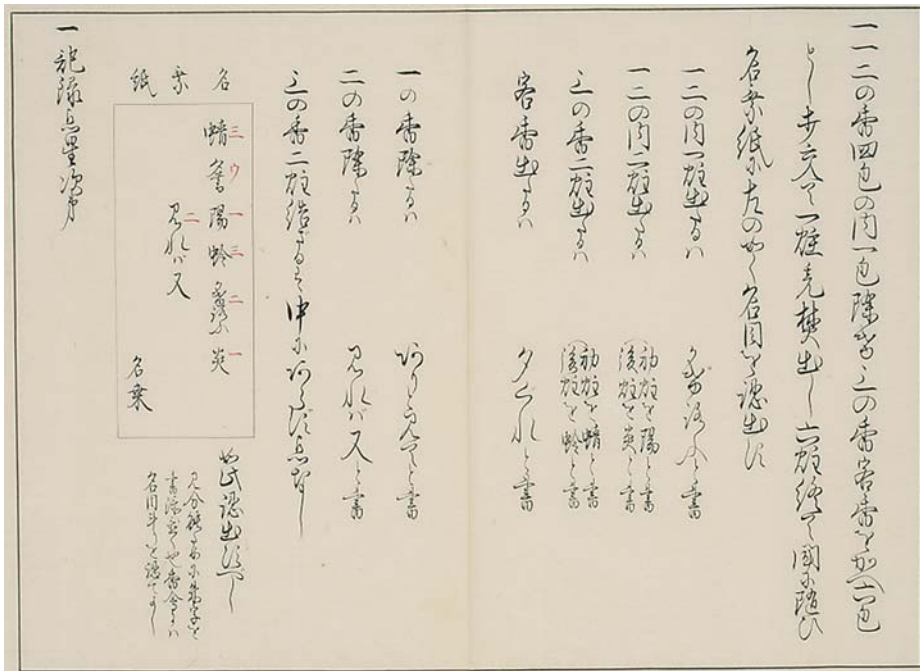
(1) 以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①〜⑥(小学館、一九九四〜一九九八年)により、その巻数と頁数を()を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。また、名目と一致する本文には傍線を付した。

(2) 『源氏小鏡』の本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、二〇〇五年)所収の第一系統第一類本による。

【影印】綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



(七十六丁裏)



(七十七丁表)

(七十七丁裏)

	名糸	名糸	名糸	名糸	名糸	木	情 吟 香 之 籠 右名抄少つゝの流どかおと 籠 詠 詠 詠 詠 詠
	情	陽	情	陽	情	之	
月	陽	情	陽	情	陽	一	
日	情	陽	情	陽	情	之	
	情	陽	情	陽	情	二	
	情	陽	情	陽	情	一	
	情	陽	情	陽	情	除 香 二	
	情	陽	情	陽	情	之 二	

○一の香の同とて生香有ハ

同香 兩少二点先 國遠香星二先也試之

行國一先先 國遠香星二先也試之

○一の香の同とて除香有ハ

同香 兩國出香二先先

行國一先先

○一の香 二瓶國香二先先行中先か

○客香 二先先

右名抄少つゝの流どかおと 籠 詠 詠 詠 詠 詠

(七十八丁裏)

一陽香の試十般香より通し小札とて川也より

結とて中より陰香と試の通し小札とて川

一陽香の中より札とて認尤の名目と籠

一の札と 小神尼 一の札と 汁板音

五の札と 小習若

一陽香二種一試を 陰香二種二外小札

皆替紙と色紙で開く

一の香と色二の香と色三の香と色四の香と色五の香と色六の香と色七の香と色八の香と色九の香と色十の香と色十一の香と色十二の香と色十三の香と色十四の香と色十五の香と色十六の香と色十七の香と色十八の香と色十九の香と色二十の香と色二十一の香と色二十二の香と色二十三の香と色二十四の香と色二十五の香と色二十六の香と色二十七の香と色二十八の香と色二十九の香と色三十の香と色三十一の香と色三十二の香と色三十三の香と色三十四の香と色三十五の香と色三十六の香と色三十七の香と色三十八の香と色三十九の香と色四十の香と色四十一の香と色四十二の香と色四十三の香と色四十四の香と色四十五の香と色四十六の香と色四十七の香と色四十八の香と色四十九の香と色五十の香と色五十一の香と色五十二の香と色五十三の香と色五十四の香と色五十五の香と色五十六の香と色五十七の香と色五十八の香と色五十九の香と色六十の香と色六十一の香と色六十二の香と色六十三の香と色六十四の香と色六十五の香と色六十六の香と色六十七の香と色六十八の香と色六十九の香と色七十の香と色七十一の香と色七十二の香と色七十三の香と色七十四の香と色七十五の香と色七十六の香と色七十七の香と色七十八の香と色七十九の香と色八十の香と色八十一の香と色八十二の香と色八十三の香と色八十四の香と色八十五の香と色八十六の香と色八十七の香と色八十八の香と色八十九の香と色九十の香と色九十一の香と色九十二の香と色九十三の香と色九十四の香と色九十五の香と色九十六の香と色九十七の香と色九十八の香と色九十九の香と色百の香

(七十九丁裏)

(七十九丁表)

(八十丁表)

一 祀 龍 香 陽 香 龍 香 二 点 八 人 二 点 九 点 陰 香 龍 香
 二 点 二 人 一 点 九 点 正 傍 有 札 香 同 名
 札 香 同 名 傍 二 点 正 一 点 對 陰 香 之 間 遠
 何 人 二 点 星 一 点 九 点 也 陰 香 試 也
 一 十 二 包 内 二 包 陰 附 陽 香 之 内 同 香 二 包 陰 香
 一 包 也 出 香 也 抄 之 是 也 同 中 之 是 也 同 中 之 是 也
 一 点 九 点 之 間 七 点 二 人 九 点 二 人 一 点 四 点 九 点
 一 点 九 点 一
 一 札 數 人 第 十 二 枝 十 八 分 而 籍 枝 一
 札 表
 十 版 香 の 札 紋 同 一
 札 表
 一 二 枝 二 二 枝 二 三 枝 四 二 枝 五 二 枝
 一 祀 龍 香 龍 香 左 祀 龍 香

(八十丁裏)

(八十一丁表)

自習香之祀

五九除

本	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
若松	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
玉椿	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
花菱	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
草薺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三
名刺	二	一	四	二	九	二	一	四	三	一	三

孝号月日

爰淳稿香

法の三ト弱ゆる道と云ふ

思りぬ山小ゆきまの札

一 試か
 一 十 版 香 の 札 同 一
 一 法 の 師 香 弱 ゆる 道 と 云 ふ 香 弱 ゆる 道 と 云 ふ 香 弱 ゆる 道 と 云 ふ 香
 香 二 点 九 点 爰 淳 稿 香 一 点 九 点 爰 淳 稿 香 一 点 九 点 爰 淳 稿 香

(八十一丁裏)

(八十二丁裏)

九般皆撰つて色紙に書く

一 五種の香色分極

法の所香 一色 為ぬ道香 二色

右の所香 一色 音紙の香色と用

法の所香 一色 思とぬ山香一色 踏まうの香一色

右の所香 一色 思とぬ山香一色 踏まうの香一色

思とぬ山香一色 踏まうの香一色 菱浮橋香一色

右の所香 一色 踏まうの香一色

右の所香 一色 踏まうの香一色

一 出香九也方々 其用う音紙色の之類と撰出に札箇
と廻ひに板同の板を香ハ竹雷同と國う其苗小合
札とつて 倭今板の香香苗小合と
國の札の下の香苗小合と
撰出に物産と廻ひの板同の香竹雷同小
有と國其苗小合札とつて又赤紙色の之類と撰
出に札小合とつて音苗色は肉用と國と香

(八十二丁裏)

(八十二丁表)

右の所香 一色 踏まうの香一色

思とぬ山香一色 踏まうの香一色

菱浮橋香一色

右の所香 一色 踏まうの香一色

(八十三丁裏)

本	若松	玉松	花葵	苗菊	名香
	二	一	二	一	三
月	三	一	二	一	三
	三	二	三	一	三
日	三	四	三	二	三
	三	四	三	二	三

(八十三丁裏)

(八十三丁表)

菱浮橋香能

竹雷同小出さ思其苗の札とつて也是の菱浮橋
香は所香とつて一色とつて之類國の所香と踏ま
し香色紙とつて一色と用と定也也

一 龍蹄とつて苗分の札各斗、認其條と踏まう也
香本も出香通、認さうと、此法の所香國一色三
つと、一色も、國は二板目、一色とつて、菱浮橋
香は、五点、二点、四点、一色、は、龍蹄、認、條、小、取、

(八十三丁表)

